

母親のテレビ視聴行動と 子どもの社会化に関する研究

押 谷 由 夫

(高知女子大学)

1 問題の所在

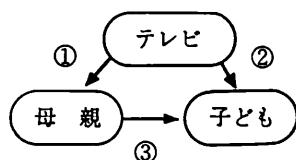
我が国でテレビ放送が開始されて30余年。その間、テレビはすっかり我々の生活に定着した。これから迎えようとするニューメディア時代。テレビはますます多様な機能を身につけ、我々の生活に入り込もうとしている。

このテレビの視聴行動及び影響に関する研究は、テレビの多機能性を反映して、様々な側面から学際的になされているといってよい。その中でも特に多いのは、子どもを対象にした研究と、婦人（母親）を対象にした研究である。

しかし、両者を比較した場合、生活構造の中にテレビがいかに入り込んでいるか、といった実態調査的研究は共通しているものの、研究の中心テーマはかなり異なっている。子どもに関しては、とくに性格形成や行動形成（社会化）、あるいは勉強や遊びとの関係でとりあげることが多いのに対し、婦人（母親）に関しては、テレビを生涯教育機器として、いかに利用するかという観点からとりあげられることが多い。このような研究テーマの違いから、子どもを対象とした研究では、テレビの有害性及び自己規制力の育成等が主張され、婦人（母親）を対象とした研究では、テレビ学習の有効性及び積極的利用が主張されることになる。

もちろん、テレビはうけ手の違いによって様々な影響を与えるから、このような傾向が生じることは当然かもしれない。しかし、母子が同居する家庭での教育、あるいは、我々がめざすべき婦人の生涯教育の実現という観点からみた場合、この両者の関連についての解明が不可欠となる。つまり、テレビと婦人（母親）の関係（図1の①）、テレビと子どもの関係（②）についての研究

図1 研究視点



と同時に、テレビと母親とのかかわりが、子ども自身の社会化にどのようにかかわっているか（①と③）という研究である。この点が明らかにされない限り、婦人の生涯教育における家庭でのテレビの位置づけがあやふやなものとなる。

既存の研究をみた場合、この種の研究は意外と少ない。母親の長時間テレビ視聴が幼児に与える影響についての事例的研究はなされているが、それらはまだ、両者の関係の全体像を明らかにするまでにはいっていない。しかし、社会教育の場では親子同時視聴についてのすぐれた実践が報告されている。親と子を同時に視野に入れることで、テレビ学習の効果を高めており、我々の研究に大きな示唆を与えてくれる。⁽²⁾

2 本研究の目的

本研究は、以上の問題意識から、とくに幼児対象を絞って、母親とテレビとの関係が子どもの社会化（とくに行動・性格形成）にどんな影響を与えるか（どんな関係にあるか）を明らかにしようとするものである。なお、対象を幼児に絞ったのは、母親のテレビ視聴行動が最も大きな影響を与える時期だと考えられるからである。

具体的には、次の3つの分析視点をたてている。

第1は、母親のテレビ視聴行動及びテレビ意識にはどんな特徴が見い出せるか。

第2は、それらは、母親の性格特性や行動特性、あるいは母親のおかれている環境条件とどのような関係にあるか。

第3は、第1にみた特徴と幼児の性格特性及び行動特性とどんな関連が見い出せるだろうか。

これらを明らかにすることから、母親自身が、家庭における生涯教育機器として、テレビとどのようにつきあえばよいかを同時に探ってみたい。

3 調査の方法と対象

調査は、アンケート方式によった。調査対象は、高松市にある2つの幼稚園（私立）に通う園児（3、4、5歳児）をもつ母親である。自分自身と自分の子どもに対して答えてもらっている。その内訳は表1の通りである。母親の年齢は30～34歳が約6割。この層を中心に前後5歳ほどの間にほとんどが含まれる。他方、子どもの方は、年少が少し少ないものの、それぞれに分かれており、男女比もほぼ等しくなっている。なお、回収されたアンケートは、さらに園の担任教師にチェックしてもらい、一応の妥当性を確認してもらっている。

調査期日は、昭和57年7月から8月にかけてである。悉皆調査であり、有効回答者

数は873名。回収率は87.0%であった。

表1 サンプルの内訳

母親の内訳		対象児の内訳 (人)						
母親の年齢	人 数		年少	年中	年長	(男)	(女)	計
30歳未満	198	A 圏	102	149	183	(231)	(203)	434
30~34歳	540	B 圏	126	152	161	(227)	(212)	439
35~39歳	113	計	228	301	344	(458)	(415)	873
40歳以上	22							
合 計	873							

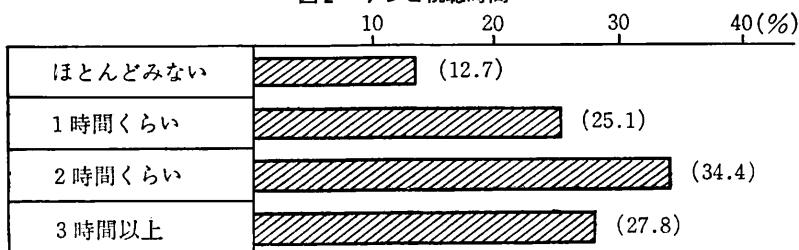
4 結果の考察

さて、結果の考察に移ろう。ここでは、先に示した3つの分析視点に従ってみていこう。

(-) 母親のテレビ視聴行動とテレビ意識

まず、母親自身が、どの程度テレビをみているか、という実態を明らかにしよう。図2は、母親のテレビ視聴時間を示している。「2時間くらい」が最も多く34.4%，平均しても約2時間くらいになる。これは、NHKの「幼児の生活とテレビ」調査(1981)に比べて1時間ほど少ない。アンケート対象を3~5歳の園児をもつ母親に限定しているためと思われる。両者を比較すると、4時間以上の割合が、本調査5.6%に対し、首都圏31%，大阪26%となっており、この違いが大きい。

図2 テレビ視聴時間



では、園児をもつ母親はどんなテレビをみているのか。表2は、番組を内容別に10に分けて、それぞれどの程度みているかを聞いている。「ニュース及び報道番組」は

ほとんどがみており、「娯楽番組一般」も85.3%の者が、「よくみる」「ときどきみる」と答えている。これら以外では、「よくみる」がぐっと低くなるが、「幼児向け番組」「料理や趣味の番組」「子どもの教育についての番組」などが多く、「ときどきみる」をあわせると70%前後になる。

表2 テレビ視聴内容

番 組	よくみる	ときどきみる	ほとんどみない	まったくみない	テレビ視聴時間※			
					ほとんどみない	1時間くらい	2時間くらい	3時間以上
幼児向け教育番組	15.3 (%)	55.6 (%)	20.5 (%)	8.6 (%)	** 2.8	2.3	2.1	2.0
料理や趣味の講習的な番組	13.2	55.1	20.6	11.1	** 2.9	2.4	2.1	2.0
歴史の教養番組	4.6	29.1	41.6	24.7	** 3.3	2.8	2.8	2.8
文学の教養番組	1.4	15.9	50.2	32.5	** 3.4	3.1	3.0	3.1
科学の教養番組	2.4	21.3	44.1	32.2	** 3.4	3.0	3.0	3.0
芸術の教養番組	3.2	32.4	40.3	24.1	** 3.2	2.8	2.8	2.8
子どもの教育についての教養番組	9.9	58.8	20.6	10.7	** 2.9	2.3	2.2	2.2
講演などの教養番組	3.3	25.1	46.8	24.7	** 3.3	2.9	2.8	2.9
ニュース及び報道番組	69.1	27.0	2.7	1.1	** 2.0	1.3	1.2	1.2
娯楽番組一般	47.8	37.5	10.7	4.0	** 2.9	2.0	1.5	1.2

(注) ※ 点数化の方法：テレビ視聴時間別にグループ分けし、各グループ内で、それぞれの番組に対して、「よくみる」としたもの1点、「ときどきみる」2点、「ほとんどみない」3点、「みない」4点として平均を出したものである。以下同じ

※※

なお、**は $P < 0.01$ で、*は $P < 0.05$ で有意差のあることを示している。以下同じ

表2の右側の部分は、今みたテレビ視聴時間の4つのタイプごとに、各番組に対して「よくみる」とした者に1点、「ときどきみる」とした者に2点、「ほとんどみない」とした者に3点、「まったくみない」とした者に4点とウェイトづけし、平均を出したものである。従って、数値が低いほど、その番組をよくみていることになる。

各数値をながめてみると、かなりの数値のバラツキがあるものの（全部において、危険率1%レベルで有意差がある）、「ほとんどみない」を除外して比べた場合、「幼児向け番組」「料理や趣味の番組」それに「娯楽番組一般」以外は、ほとんど視聴時間

ごとの差異はない。これら3つの番組においては、視聴時間が長いほど、数値が低い。つまり、テレビをよくみる母親は、とくに「娯楽番組」「幼児番組」「料理や趣味の番組」をよくみる傾向のあることを示している。

表3 テレビ意識

	まったくそう思う	どちらかといえはそう思う	どちらかといえはそう思わない	そうは思わない	テレビ視聴時間				
					ほとんどみない	1時間くらい	2時間くらい	3時間以上	
テレビにはいい面もあるが、悪い影響のことを考えれば、ない方がよい	4.8 (%)	21.3 (%)	46.5 (%)	27.3 (%)	**	2.6	2.9	3.0	3.1
テレビはあくまで楽しむものだ	7.0	40.4	29.8	22.7	2.7	2.7	2.7	2.6	
テレビを利用した学習では、あまり自分を高められない	1.9	24.3	47.3	26.3	3.0	3.0	3.0	3.0	
テレビを利用した学習会がもっとあるとよい	13.7	49.1	26.0	11.0	**	2.6	2.2	2.4	2.3
テレビを利用した学習になれるのが大変だ	10.4	42.8	27.8	18.9	**	2.5	2.7	2.5	2.5
テレビは子どもの教育を考えるのに参考になる	13.1	62.9	19.7	4.4	**	2.3	2.1	2.2	2.1

次に、母親自身がテレビをどのように意識しているかを見てみよう。表3は、テレビあるいはテレビ利用学習についての意見をまとめたものである。まず、テレビそのものの存在の是非を問う「テレビにはいい面もあるが、悪い影響のことを考えればない方がよい」では、「まったくそう思う」は4.8%、「どちらかといえはそう思う」は21.3%であわせて26.1%。あとはテレビ肯定派ということになる。「テレビは子どもの教育を考えるのに参考になる」に対しても76.0%の者が肯定的である。さらに、「テレビを利用した学習では、あまり自分を高められない」とした者は26.2%。⁽⁵⁾4人に3人は自己を高める機器として、テレビを積極的に評価していることになる。テレビ利用学習会についても、かなり積極的だといってよい。

なお、これらの意見とテレビ視聴時間との関係をみると（点数化の方法は表1と同じ）、「テレビにはいい面もあるが、悪い影響のことを考えなければならない方がよい」という意見に対しては、よくみている人ほど否定的になっているが、それ以外は、視聴時間ごとの特徴はでていない。ただ、「テレビ利用学習希望度」や「テレビは子どもの教育を考えるのに参考になる」に関しては、テレビをほとんどみない人とそれ以外の人とでは反応が違っている。「ほとんどみない」とした人は否定的な反応を示す傾向がある。

(二) 母親のテレビ視聴行動及びテレビ意識の規定要因

では、このような母親のテレビ視聴行動及びテレビ意識は、どのような要因によって影響をうけているだろうか。

表4の①は、テレビ視聴時間に影響のありそうな変数を抽出し、関係を調べたものである。各変数の点数化は、カテゴリーごとに備考のようなウェイトづけをし、母親のテレビ視聴時間ごとで平均を出したものである。危険率1%レベルで有意差のある変数は、母親の年齢、母親の学歴、そして学習意欲である。つまり、幼児をもつ母親の年齢が高いほど、また、母親の学歴が高学歴であるほど、テレビ視聴時間は短い傾向にある。さらに学習意欲も、3時間以上みるとそれ以下の人とでは違いがでている。3時間以上みるとそれ以下の人と比べて学習意欲が低い傾向にある。

他の要因では、有意差はでていないが、母親の教育熱心度や集中力に、テレビ視聴時間が短いほど強くなる、という傾向をよみとれる。しかし、母親の性格との関連は、全体的にあまりない。

表4の②～④は、さらに視聴番組の内容ごとに関連をみたものである。②の幼児むけ番組の場合、危険率1%レベルで有意差のある変数は、母親の学歴、地域活動となっている。テレビ視聴時間の場合とは逆に、高学歴者ほど、また地域活動に活発な人ほどよくみると、という傾向を示している。

③の一般娯楽番組では、逆に視聴時間とよく似ている。つまり、年齢が高いほど、また高学歴者ほど、さらに、教育熱心な母親ほど、視聴時間は短くなる傾向にある。

④の子どもの教育に関する番組では、母親の性格や行動特性との関連がより明確になっている。自主性や人づきあいのある人ほど、また、地域活動によく参加し、テレビ利用学習会やその他の学習に対する意欲が強いほど、よくみるという傾向がうかがえる。

以上の結果を総合すると、テレビ視聴時間や一般娯楽番組は少しひかえて、幼児向け番組やとくに子どもの教育に関する番組をみている母親ほど、積極的で社交的な行動特性・性格特性をみにつけているといえよう。

さて、次に、母親のテレビ意識の場合を見てみよう。表4の⑤のA「テレビは楽しむものだ」とする意見に対する反応に關係している変数としては、テレビ学習会への参加希望や学習意欲があげられる。つまり、学習会への参加希望や学習意欲の低い人ほどテレビは楽しむものだと考えがちなことを示している。

今度は逆にBの「テレビを利用した学習会があればよい」という意見に対する規定要因をさぐってみる。当然ながら、地域活動やテレビ学習会への参加希望、学習意欲が高いほど、テレビ利用学習への要求が高い。どちらも母親の行動特性との関連が強

表4 母親のテレビ視聴行動及びテレビ意識の規定要因

① テレビ視聴時間の場合

母親 のテレビ 視聴時間	子 ど も の 学 年	母 親 の 年 齢	母 親 の 學 歴	母 親 の 性 格					母 親 の 行 動 特 性			母 親 の 教 育 熱 度
				自 主 性	根 強 さ	陽 気 さ	集 中 力	人 づ き あ い	地 域 活 動	テ レ ビ 参 加 希 望	学 習 意 欲	
ほとんどみない	2.2	2.1	1.9	2.0	2.0	1.8	1.8	1.9	3.2	2.9	2.0	2.3
1時間くらい	2.2	2.0	1.6	2.0	1.9	1.8	1.9	1.8	3.0	2.6	1.9	2.3
2時間くらい	2.1	1.9	1.5	2.0	1.9	1.6	1.9	1.8	3.0	2.7	2.0	2.4
3時間以上	2.0	1.8	1.3	2.1	2.1	1.7	2.0	1.8	3.1	2.7	2.2	2.5

備考

子どもの学年……「年少」1点、「年中」2点、「年長」3点

母親の年齢……「30歳未満」1点、「30~35歳未満」2点、「35歳以上」3点

母親の学歴……「中高卒」1点、「短大卒」2点、「大学卒」3点

母親の性格のところはすべて……「かなりある」1点、「まあまあある」2点、「あまりない」3点、「ほとんどない」4点

母親の行動特性……「よくする（非常に）」1点、「ときどきする（ときどきある）」のところはすべて2点、「あまりしない（ほとんどない）」3点、「しない（ない）」4点

母親の教育熱心度……「非常に熱心」1点、「熱心な方」2点、「ふつう」3点、「あまり熱心でない」4点として平均値を出している。以下同じ。

② 幼児むけ番組の場合

よくみる	2.0	1.9	1.4	2.0	1.9	1.6	1.8	1.7	2.9	2.6	2.0	2.4
ときどきみる	2.1	1.9	1.5	2.0	2.0	1.7	1.9	1.8	3.0	2.7	2.1	2.4
ほとんどみない	2.2	1.9	1.6	2.1	2.1	1.8	2.0	1.9	3.2	2.8	2.0	2.4
みない	2.3	2.0	1.7	2.0	1.9	1.9	1.9	1.9	3.5	2.9	2.2	2.5

③ 一般娯楽番組の場合

よくみる	2.1	1.8	1.4	2.1	2.0	1.7	2.0	1.8	3.1	** 2.7	2.1	2.4
ときどきみる	2.2	2.0	1.5	2.0	1.9	1.7	1.9	1.8	3.0	2.6	2.0	2.5
ほとんどみない	2.2	2.1	1.9	2.0	1.9	1.8	1.8	1.9	3.3	3.0	2.0	2.2
みない	2.4	2.2	2.0	1.9	1.9	2.0	1.8	1.9	3.1	2.8	1.9	2.1

④ 子どもの教育に関する番組の場合

よくみる	2.2	2.1	1.5	1.8	1.8	1.6	1.8	1.7	2.6	** 2.3	1.7	2.4
ときどきみる	2.1	1.9	1.5	2.0	2.0	1.7	1.9	1.8	3.0	2.6	2.0	2.4
ほとんどみない	2.2	2.1	1.9	2.0	1.9	1.8	1.8	1.9	3.3	3.0	2.0	2.2
みない	2.2	2.2	2.0	1.9	1.9	2.0	1.8	1.9	3.1	2.8	1.9	2.1

⑤ テレビ意識の場合

A 「テレビは楽しむもの」

まったくそう思う	2.2	1.9	1.6	2.1	2.2	1.8	2.0	2.0	3.3	** 2.9	2.3	2.6
どちらかといえばそう思う	2.1	1.9	1.4	2.0	2.0	1.7	1.9	1.8	3.1	2.8	2.2	2.4
どちらかといえばそう思わない	2.1	2.0	1.6	2.1	2.0	1.8	1.9	1.8	3.0	2.6	1.9	2.3
そうは思わない	2.1	2.0	1.5	2.0	1.9	1.7	1.9	1.8	3.0	2.6	2.0	2.4

B 「テレビ利用学習会があるとよい」

まったくそう思う	2.1	2.0	1.5	1.9	2.0	1.7	2.0	1.8	** 2.8	** 2.4	1.8	2.4
どちらかといえばそう思う	2.1	1.9	1.4	2.1	1.9	1.7	1.9	1.8	3.0	2.5	2.1	2.4
どちらかといえばそう思わない	2.1	2.0	1.6	2.1	2.0	1.7	2.0	1.8	3.2	2.9	2.1	2.4
そうは思わない	2.2	1.9	1.5	2.0	2.1	1.7	1.8	1.9	3.4	3.4	2.2	2.5

く、性格的側面や年齢、学歴などの属性要因には、あまり影響されないとえそうである。

(二) 母親のテレビ視聴行動、テレビ意識と

幼児の性格・行動特性との関連

さて、最後に、母親のテレビ視聴行動、テレビ意識と幼児の性格や行動特性との関係についてみてみる。

表5は、林の数量化理論第II類を用いて、幼児のテレビ視聴時間の規定要因の分析を行ったものである。まず関連のありそうな変数を選んで、第1次分析を行い、偏相関係数の高い変数を抽出し、第2次分析を行っている。相関比は0.4557。外的規準の各グループごとの平均値は「ほとんどない」から「3時間以上」にいくにしたがって、低くなっている、数値が高いほど、「みない」に関係し、低いほど「よく見る」に関係をもつと解釈できる。

規定要因の強さを示す偏相関係数をみると、1番高いのが、母親のテレビ視聴時間である。カテゴリーと数値をみると、母親がテレビをみないほど数値が高く、見る時間が長いほど数値が低い。子どもと母親のテレビ視聴時間とは、きわめて強い関係にある。次に高いのが就寝時間。子どもが遅くまで起きているほどテレビ視聴時間は長い。また、幼稚園による違いもでている。A園においては、テレビ視聴について、園独自の指導をしており、その成果があらわれているとみてよい。

さらに、子どもに対する態度のところをみると、あまり面倒をみない、ついほったらかしてしまう、つい小言をいいうような親に育てられている子どもは、よくテレビをみがちなこともわかる。母親のテレビ視聴時間を外的要因として、分析した結果でも、ついしかったり小言をいっててしまう母親ほどテレビをよく見る傾向があった。また、わが子をお父さんっ子であると評価する母親ほどテレビをみがちなことも示していた。

つまり、母親のテレビ視聴時間は、子どもへの接し方に影響し、その母親の態度が逆に子どものテレビ視聴時間に影響する。そして、結局、子どもは母親と同じ視聴傾向を示すようになる、といえそうである。具体的にいえば、テレビをよく見る母親は、子どもをしかったり、小言をいったり、いいかげんに扱ったりする傾向があり、そのことから、子どもも母親から離れていき、テレビをよく見るようになりがちだといえよう。

次に、子どもたちの性格と母親のテレビ視聴行動や意識との関係をみることにしよう。図3は、母親が行ったわが子の性格・行動評価を林の数量化理論第III類によって分類したものである。母親の子ども評価は、子どもの行動を評価する場合に最も基本

表5 数量化II類による幼児のテレビ視聴時間の規定要因の分析

I 軸

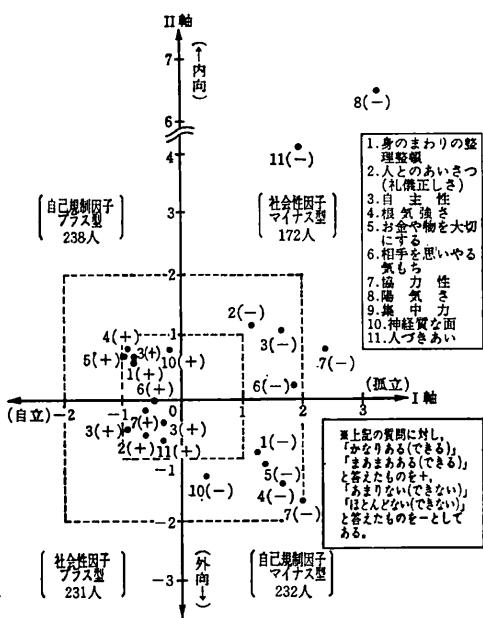
ア イ テ ム		カテゴリー	数 値	レンジ	偏相関係数 (順位)
幼児の性格	身のまわりの整理整頓	+	0.0024 -0.0038	0.0062	0.0015(12)
	根 気 強 さ	+	0.0316 -0.0557	0.0873	0.0205(9)
日常行動	就 寝 時 間 (幼児)	8時以前 8~9時 9時以後	0.6653 0.2542 -0.7577	1.4230	0.2285(2)
母期親の待	将来自分たちの面倒をみてもらいたい	+	-0.0697 0.0312	0.1009	0.0232(8)
子どもに対する態度	つい面倒をみてしまう	+	0.0554 -0.0674	0.1228	0.0286(7)
	ついほったらかしてしまう	+	-0.1840 0.0819	0.2659	0.0577(5)
	つい 小 言 を い う	+	-0.0092 0.0368	0.0460	0.0090(9)
母親の意識	今の世の中正直ものがそんをする	+	0.0158 -0.0150	0.0308	0.0077(10)
	子どもはしかった方がよい	+	-0.1326 0.0452	0.1778	0.0386(6)
	テレビはない方がよい	+	0.0117 -0.0042	0.0159	0.0035(11)
母親のテレビ視聴時間		ほとんどみない 1時間くらい 2時間くらい 3時間以上	0.8861 0.5253 0.2552 -1.1933	2.0794	0.3487(1)
母 親 の 学 歴		中, 高卒 短大卒 大学, 大学院卒	-0.0972 0.1877 0.1358	0.2330	0.0631(4)
幼 稚 園		A 園 B 園	0.1567 -0.1550	0.3117	0.0769(3)

相関比0.4557

外的基準のグループ別平均
 「ほとんどない」 0.6560
 「1時間くらい」 0.2520
 「2時間くらい」 -0.1769
 「3時間以上」 -1.0595

(注) カテゴリーの+は肯定的反応, -は否定的反応を意味する。

図3 数量化III類による「母親の子ども評価」の分類



的と考えられる要因を、各種調査を参考に11項目選び、それぞれに「かなりある（できる）」「まあまあある（できる）」「あまりない（できない）」「ほとんどない（できない）」の4段階で評価してもらった。具体的な評価項目は図3の通りである。

その結果を、「かなりある(できる)」と「まあまあある(できる)」と答えたものを肯定的反応(+)、「あまりない(できない)」「ほとんどない(できない)」と答えたものを否定的反応(-)として2変数とし、林の数量化理論第Ⅲ類で解析した。その結果、類型化に有効な判別をもつI軸とII軸を抽出した。

I 軸は、陽気さ、協力性、集中力、相手を思いやる気持ちといったものが少ないと評価するタイプと、お金やものを大切にする、根氣がある、自主性があると評価する(6)タイプを判別する軸と解釈できる。仮に「孤立一自立」の軸と名づける。

II軸は陽気さがない、人づきあいがよくない、あいさつもあまりしない、自主性がないと評価するタイプと、集中力や根気はないが、神経はわりに太いと評価するタイプを判別する軸と解釈できる。仮に「内向一外向」の軸と名づける。

図3は、この2つの軸をクロスさせたものである。第1象限と第3象限に、陽気さ、人づきあい、礼儀正しさ、といった社会性因子のプラスとマイナスがふりわけられている。他方、第2象限と第4象限には、集中力、根気強さ、ものを大切にする、といった自己規制因子のプラスとマイナスがふりわけられている。これらの結果から、母親の評価による子どもの性格・行動特性は、大きく「社会性因子プラス型」、「社会性因子マイナス型」、「自己規制因子プラス型」、「自己規制因子マイナス型」の4つに分けることができる。

では、こういった子どもの性格・行動特性と、母親のテレビ視聴行動及びテレビ意識との関係はどうだろうか。各変数のサンプル・スコアーの平均によってみると、

しよう。サンプル・スコアとは、各回答者が、それぞれの軸（尺度）のどの位置にいるかを示す値である。サンプル・スコアの平均とは、各軸に対してえられた個人の数値を、カテゴリーごとに足して、総数で割った値である。

図4の①は、母親のテレビ視聴行動を示す変数の各サンプル・スコア平均を図示したものである。母親のテレビ視聴時間を見ると、「ほとんどみない」と「3時間以上」と答えた母親の子どもは、「自己規制因子マイナス型」に、「2時間くらい」の場合は、「自己規制因子プラス型」に、「1時間くらい」は「社会性因子プラス型」である可能性の高いことを示している。つまり、母親がテレビをみないのも、逆にみすぎるのも、子どもの性格・行動形成にとって、望ましくない。むしろ、1~2時間くらいみている方が子どもは社会性や自己規制力をみにつけていくことになる。

また、番組別でみると、娯楽番組では1の「よく見る」場合は、「社会性因子マイナス型」、それ以外は「自己規制因子プラス型」「社会性因子プラス型」に位置づけられる。子どもの教育に関する番組及び、幼児向け番組の場合は、逆に「よく見る」や「かなり見る」が、「自己規制因子プラス型」や「社会性因子プラス型」になっており、3の「あまりみない」や4の「ほとんどみない」が、それぞれのマイナス型に位置づけられている。つまり、テレビ番組も、娯楽番組はひかえめにして、子どもの教育に関する番組や幼児向け番組を見るようにするのが望ましいことになる。しかし、それらも合計で1日1~2時間程度におさえることが必要である。

次に、母親のテレビ意識との関係をみてみよう（図4の②）。「テレビは楽しむのだ」という意見に対する各カテゴリーのサンプル・スコア平均をみると、「まったくそう思う」は「社会性因子マイナス型」、「そう思わない」は「自己規制因子マイナス型」に位置づけられる。「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」の比較的中立的な意見に対しては、それぞれ「社会性因子プラス型」になっている。つまり、テレビを単なる娯楽用に考えたり、逆に学習機器としてのみ考えるのは、子どもの性格・行動形成にとってあまり望ましくないことがわかる。

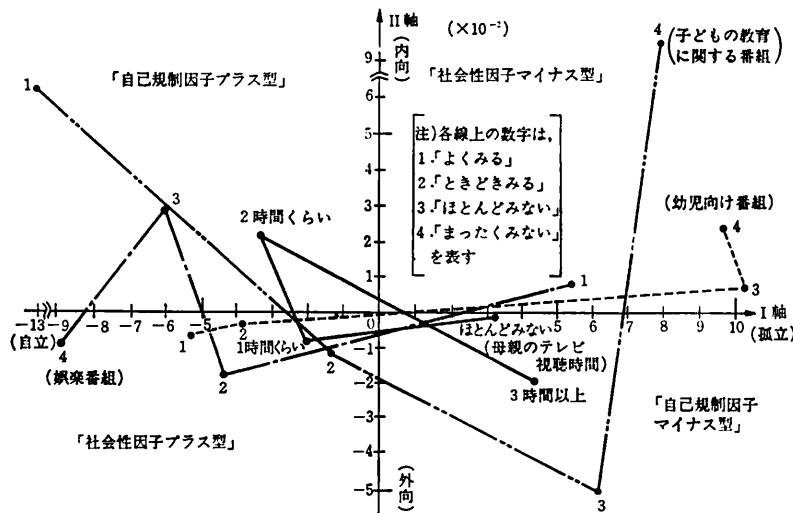
また、「テレビはない方がいい」という意見に対しても、肯定的であるほど「自己規制因子マイナス型」に位置づけられる。子どもがテレビをみすぎるから、ない方がいいと考える場合もあるが、母親がテレビに対して、あまりストイックに考えすぎると、かえって子どもは望ましくない行動を身につけることになるといえよう。

四 まとめと今後の課題

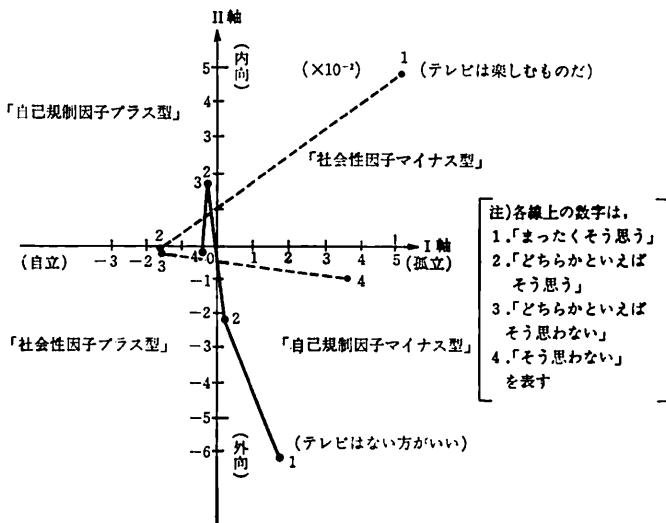
以上、我々は、先に示した分析視点に従い、母親のテレビ視聴行動及びテレビ意識の特徴、それを規定する要因、さらに、それが子どもの性格・行動特性とどんな関係にあるかを見てきた。それらをまとめてみると、以下のようになろう。

図4 サンプル・スコアによる分析

① テレビ視聴行動の場合



② テレビ意識の場合



- ① 園児をもつ母親のテレビ視聴時間は、平均2時間くらいであり、よくみる人は、「娯楽番組」「幼児番組」「料理や趣味の番組」を多くみる傾向がある。
- ② テレビに対する意識は、だいたい4人に3人は肯定的であり、自己を高めるものとして評価している。
- ③ テレビ視聴時間と一般娯楽番組の視聴時間が長い人は、年齢が若く、学歴が低く、学習意欲も低い傾向がある。逆に、子どもの教育に関する番組をよくみる人は、年齢や学歴はあまり関係なく、自主性があり、人づきあいがよく、また地域活動によく参加し、学習意欲の強い人が多い。
- ④ テレビ意識に関しては、学習意欲の低い人ほどテレビは楽しむものだと考えがちであり、テレビを学習に利用しているうとする人は、地域活動への参加希望や様々な学習への意欲が高い。
- ⑤ 幼児のテレビ視聴時間は、母親のテレビ視聴時間、就寝時間、園の指導などによって左右される。また、母親の子どもに対する態度も影響し、小言をいったり、十分な接触をしなかったりすると、視聴時間は長くなる傾向がある。
- ⑥ 幼児の性格・行動特性との関連では、母親が1~2時間くらいテレビをみており、しかも、子どもの教育に関する番組や幼児向け番組をみているほど、望ましい特性を身につけている傾向にある。また、テレビは楽しむものでもあり、学習するためのものもあるという風に柔軟に考え、テレビの存在意義をみると、気楽につきあっている母親ほど、子どもの性格・行動特性もよくなっている。

これらの結果から、母親が生涯教育機器としてテレビを積極的に利用することは、子どもの性格・行動形成にとってプラスに作用することがわかる。ただしそのための条件として、1日のテレビ視聴時間は2時間以内におさえる。娯楽番組もみることが必要だが、あまりみすぎないようにし、子どもの教育に関する番組などを積極的にみるように心がける。テレビにあまり神経質にならないで気楽につきあっていく。また、地域活動や学習会などに積極的にかかわる、子どもに対しては許容的でよく接触するよう心がける、といった姿勢が大切である。

我々の研究の最終的な目標は、テレビを生涯教育機器としてどう利用し、母親と子どもの教育、ひいては家庭や地域社会の教育に役立てていくか、という具体的活用法を探ることである。本研究は、その基礎として、母親のテレビ視聴と子どもの社会化の関係を明らかにしたわけである。以上の分析からそのおおよそは把握できたが、しかし、ここで明らかにした関係には、さらに多くの要因が作用している。それらを解明する必要がある。母親と子どもの社会化に影響を与える他の要因とともに視野に入れることによって、より効果的なテレビ活用法が明らかになろう。そしてさらに、家庭でのテレビ視聴を考えるには、祖父母のテレビ視聴行動等との関係の分析も不可

(8)
欠である。これらを今後の課題としたい。

〔注〕

- (1) 子どもとテレビの影響に関する研究は、依田明編『テレビの児童に及ぼす影響』東大出版、1964年を端緒として様々な研究がなされている。最近のものとしては、稻村博・小川捷之編『テレビ』共立出版、1981年、深谷昌志『孤立化する子どもたち』日本放送出版協会、1983年、子どもの文化研究所編『子どもの発達とテレビ』童心社、1979年、子どものテレビの会編『テレビと子ども』学陽書房、1981年、無藤隆「テレビが子どもに及ぼす影響」(『東京大学新聞研究所紀要』第27号、1979年、所収)等を参照。また婦人(母親)とテレビについては、各教育委員会やNHK(地方局も含めて)などから主に『社会(婦人)教育における放送利用』等のタイトルで実践的な報告がなされている。さらに片岡徳雄・住岡英毅『見る・集まる・学ぶ』日本放送出版協会、1981年、放送利用社会教育研究会『テレビで学ぶ』日本放送教育協会、1979年、南本長穂「婦人のテレビ視聴行動に関する実証的研究(1)」(愛媛大学教育学部 教育学研究室編『教育学論集』第7号、1978年)、川隅佳子他「婦人問題と放送利用」(日本生涯教育学会編『地域の中の生涯学習』ぎょうせい、1984年)等の理論的実証的研究がある。
- (2) 例えば『児童心理学の進歩』金子書房(毎年)、『保育研究の歩み』医歯薬出版(毎年)や日本生涯教育学会、日本社会教育学会、日本教育社会学会等の紀要論文及び文献目録をみればよい。
- (3) 例えば、埼玉県の実践などがある『放送利用学習による社会教育』(埼玉県教育委員会)。また、L. ホウ、B. ソロモン著・荒このみ訳『テレビの上手なみせ方』学陽書房、1981年、等も参考になる。
- (4) NHK放送世論調査所編『幼児の生活とテレビ』日本放送出版協会 1981年
- (5) 上記調査においても、また、様々な調査をみても、テレビに対する母親の評価はかなり肯定的である。
- (6) 本分析では軸の抽出より、分類に重点をおいているため、軸の名称は若干強引に行った。
- (7) このことについては、拙稿「母親と子どもの社会化に関する一考察」(高松短期大学『研究紀要』第14号、1984年)で若干の考察を行っている。
- (8) 愛媛大学の南本長穂助教授を代表とする昭和58年度後期放送文化基金助成研究「高齢者の自己実現(生きがい形成)過程にみる放送利用の研究」において、筆者もメンバーの一員として、このテーマを追求している。

母親のテレビ視聴行動と子どもの社会化に関する研究 149

※ 本調査を実施するにあたり、高松短期大学教授井上範子先生、高松市の高松東幼稚園長亀井熙怡子先生はじめ調査対象園の先生には大変なお世話になった。心より感謝します。

※※ 統計的処理は、香川大学計算センターの MELCOM COSMO-700S、京都大学大型計算センターの FACOM M-382 によった。プログラムは SPSS を使用した。

付記 本論文は、第5回日本生涯教育学会（1984年）で発表した内容に加筆したものである。